

三木光斎の図解単語集の研究  
——『通俗英吉利単語篇』の影響下で——  
A Study of Miki Kosai's Pictorial Wordbooks:  
Under the Influence of *Tsuzoku Igrisu Tangohen*

熊谷允岐

Masaki KUMAGAI

キーワード

英単語集、英語参考書、英語語彙学習、英学史

English wordbooks, reference books for learning English, English vocabulary learning,  
history of English language studies

**Abstract:** This study focuses on four pictorial wordbooks published by Miki Kosai in the early Meiji period with the aim of clarifying how they were compiled and how they supported English vocabulary acquisition among Japanese learners during the Meiji period. Several previous studies have reported that one of the wordbooks by Miki Kosai was based on *Tsuzoku Igrisu Tangohen* (Book of the Instruction for a Member of the General Public) which was published in the Meiji era and very influential at the time, but this study has also revealed the existence of a different source. Furthermore, although all the pictorial wordbooks discussed in this study were published in the same year, this study compares their contents and postulates the order in which they were likely compiled. It is particularly noteworthy that there were several efforts to help learners to acquire English vocabulary more easily, taking into account their proficiency level and needs. For example, for the convenience of his learners, Kosai intentionally replaced Western concepts with Japanese ones in his illustrations. This point has been reported to have a certain effectiveness from the perspective of vocabulary acquisition theory.

## 1. はじめに

『英吉利単語篇』とは、1871年に梅浦元善によって著された英単語集（以下、単語集）の一つで、その源流は1866年編纂の『英吉利単語篇』（開成所刊）に遡ることができる。『英吉利単語篇』はもともと、英語の見出し語を収録するだけで、それに対応した訳語が併記されず、独学には不向きな内容だった。一方で、『英吉利単語篇』は独学者に便宜を図り、『英吉利単語篇』の見出し語に日本語訳のほか、片仮名で発音表記を添えて発刊したところ、すぐに当時のベストセラーとなった。『英吉利単語篇』の勢いはとどまるところを知らず、後年の多くの英学書に影響を与えた。数えるところでは、少なくとも12冊の英学書にその形跡をみることができる（熊谷、2022）。それらのなかに、本研究でとりあげる三木光斎著『英學童観抄』（1873）という単語集が存在する。

## 2. 問題の所在

『英學童観抄』をこれまでに分析対象とした研究は少ないが、渡辺（1962a）はその詳細に踏み込んだ貴重な研究の一つとして注目される。渡辺が本書を『英學童観抄 卷之壹』<sup>1</sup>と紹介するとおり、本書には続編が刊行されている。渡辺自身は続編の存在を実際には確認できていなかったようだが、『英學童観抄 卷之壹』と同年に『英學童観抄 卷之貳』が出版されていることを、筆者は確認済みである。しかし、従来『英學童観抄 卷之貳』が研究でとりあげられたことはなく、渡辺の言及する『英學童観抄 卷之壹』や、その依拠資料となったとされる『英吉利単語篇』との関係性も不明なままである<sup>2</sup>。さらに、調査を進めるにつれて、三木は2冊の『英學童観抄』以外にも単語集を編纂していることが判明した。当然、それらが学際的な見地から詳細に論じられたことはこれまでなかったようである。これは、明治期の日本で多大な影響力をもった『英吉利単語篇』がその後どのような形で他編纂者の単語集に活用されたかについて、明らかにされていないということを意味するとともに、単語集編纂史の重要な一部分が未解明なままであるといえよう。明治期における英語語彙学習や、それともなう教材編纂の歴史をより正確に理解するためには、三木光斎が編んだ複数の単語集について改めて調査を行うことが、理論的に重要だといえる。

## 3. 本論の目的と対象

本研究は2冊の『英學童観抄』をはじめとする、三木光斎の編纂した単語集群に焦点をあて、それらがどのような目的で編纂され、どのような特徴を有しているのか、また先行の『英吉利単語篇』とどのような影響関係にあったのかについて明らかにすることを目的とする。さらに、三木の編んだ単語集群同士の比較分析を通して、明治期における日本人の英語語彙学習の一端を明らかにすることをめざす。

本研究でとりあげる単語集の多くは、国立国会図書館のデジタルアーカイブで一般公開されているものであり、筆者もそれらを主な参照元として調査を進めた。他所の所蔵本も含めて、参照資料の詳細を文末註において明記しているので、適宜確認されたい。『日本英学資料集成』に所収された資料の図版に関しては、丸善雄松堂より転載の許諾を受けたうえで利用している。

## 4. 『英學童觀抄 卷之壹』 (1873)

### 4.1. 概要

全国的な教育政策の拡充や英学本位制の導入、それにとまなう巷での英学熱が高まった明治時代初期、三木光齋によって一冊の単語集が編纂された。『英學童觀抄 卷之壹』(以下、『卷之壹』)<sup>3</sup>がそれである。1873年10月に刊行された本書は、総見出し語数444語<sup>4</sup>のそれぞれに挿絵を付した図解単語集の一つとして知られる。松田編(2018)も報告するとおり、本書は挿絵に彩色が行われた木版多色刷りである。具体的には緑、紅、黄の三色を基本としながら、時には青を混じえて事物を描いている(渡辺、1962a)。著者の三木光齋は別名、歌川芳盛と呼ばれ、幕末から明治期に活躍した浮世絵師としても知られる。おもに武者絵や花鳥画を得意としていたが、三木の名で文人画も描いていた<sup>5</sup>ことから、三木の単語集に挿絵が添えられていたのは自然であったと考えられる。

『卷之壹』では、おもに1頁が三段三行の九枠に区切られ<sup>6</sup>、その一枠ごとに英語の見出し語とそれに対応したカナ発音、読み仮名を添えた訳語、そして挿絵が併記されている(図1)。



図1.『卷之壹』本文における魚類の頁 [国会図書館蔵]

図1を見るかぎり挿絵はけっして緻密ではないが、たとえば類似の海洋生物であっても、その描き分けは意識的になされているようである。また、明確に区分されているわけではないが、おおよそのテーマに沿って見出し語が配列されているのは明らかである。『卷之壹』ではおもに鳥類、ほ乳類、昆虫類、魚類と続き、職場、職業、仕事道具、建築物など、およそ30の部類に大

別されているようである。ただし、鳥類は1頁目で登場したのちに25頁で、昆虫類は3頁目で登場したのちに28頁で再登場するなど、その意図が明らかでない点もみられる。

カタカナの発音表記に注目すると、当時のほかの英学書にもしばしばみられるオランダ語発音の特徴が混在しているが、すべての見出し語にあてはまるわけではない。例えば、図1右上の「<sup>カーブ</sup> carp <sup>こい</sup> 鯉」では、rの音に長音符が用いられている。一方で、右下の「<sup>ヘルリン</sup> herring <sup>にしん</sup> 糟白魚」では、rの音にオランダ語発音由来の「ル」の字が添えられている。いずれにせよ、オランダ語訛りで英語を学ぶことは、必ずしも正確な音声の習得にはつながらなかった可能性を否定できない。明治期の日本では、現代のように英語学習の環境が定着していたわけではない。英語に長けた者や教員の補助がなければ、『卷之壹』だけで本来の英語発音を学ぶのは難しかったと考えるのが自然だからである。

#### 4.2. 先行資料との関連性

『卷之壹』の自序では、世に刊行されている「英吉利単語」と称した学習書や、「基本単語図解」という図解本に倣って、子ども向けに編纂された旨が述べられている。前者の「英吉利単語と称した学習書」が『英吉利単語篇』をさすというのが渡辺(1962a)の指摘である。渡辺によれば、訳語にあてられた漢字とその振り仮名、見出し語の仮名発音の一致からそのような判断が可能だという。渡辺も述べるように、当時は先行資料を用いていても、それが何かを伏せたまま刊行する場合や、たとえそれを明記していても単に書名だけを借りて自著を権威づけるにすぎない例もあった。それらに比べれば、自序に明記したとおりの資料を取り入れた『卷之壹』の編纂態度は良心的である。

では、後者の「基本単語図解」が何かというと、豊田(1963)に収録される「日本英学 筑紫文庫 目録」において『基本単語図解』としてその存在を確認できる。本書は三木本人による著書として記載されているが、その場合、『卷之壹』の依拠資料としてとりあげるところにいささかの違和感が生じる。現在、当該の目録を所有する九州大学付属図書館で『基本単語図解』を検索すると、『英學童觀抄 卷之一』という名称で所蔵されているのも妙である。九州大学付属図書館(2020、私信)によると、もともと目録に記載されていた『基本単語図解』は題箋ならびに内題が欠落しており、その書名が明らかでなかったという。ただ、当該の図書館に所蔵される別の『卷之壹』と同一の内容であったことから、登録の名称を『基本単語図解』から『英學童觀抄 卷之一』へ変更したという。『基本単語図解』の受け入れ当時は戦時中という事情もあり欠損部が多く、書名が不明なままであった。そこで、序文の中から書名に相当しうる箇所、すなわち「基本単語図解」という文言を抜き出し、仮の書名として採用した結果、「日本英学 筑紫文庫 目録」にそのような形で記載されるに至ったのではないかと、との回答を得たのである。つまり、「日本英学 筑紫文庫 目録」に記載の『基本単語図解』は、題箋と内題が欠損した『卷之壹』にすぎないのであるが、それは正真正銘の『基本単語図解』が現在、その存在を確認されていないことを意味する。『卷之壹』の序文に従うならば、少なくとも『基本単語図解』は『卷之壹』とはまったく別の編纂物であるのと同時に、『卷之壹』より以前に刊行されたものであるとの見方が妥当であろう。『基本単語図解』がどのようなものであったかについては、引き続きの調査が必要となるだろう。

なお、三木光斎は『卷之壹』を刊行する以前に『和洋以呂波』(1871)や『和洋字混部類初編』(1872)といった英学書も編纂している。内容を確認するかぎり<sup>7</sup>、両者に英語の見出し語は収録されていなかった。代わりに、日本語の名詞をローマ字で綴ったものが多く収録されてい



る。これは、屋名池 (1991) が述べるところの横文字紹介書というもので、外国文字の紹介が主要な機能とされる。いずれにせよ、英単語を収録する『卷之壹』とは性質が大きく異なることもあるせいか、本書が『蘭和洋以呂波』や『和洋字混部類 初編』から影響を受けた形跡はみられなかった。後者の英学書には挿絵も多く含まれ、それらのいくつかは、『卷之壹』でとりあげられる事物と一致する。しかし、挿絵に関してもまったく同じ描き方はされず、異なる板木が用いられていたことから、影響関係はなかったと考えてよいだろう。

## 5. 『英學童觀抄 卷之貳』 (1873)

### 5.1. 概要

『卷之壹』が刊行された2カ月後に、『英學童觀抄 卷之貳』(以下、『卷之貳』)<sup>8</sup>が出版された。前にも述べたとおり、本書が研究対象となるのは稀であるが、松田編(2018)の報告する書誌情報が参考になる。それによると、『卷之貳』は『卷之壹』と同様に木版多色刷りで刊行されている。筆者はデジタルアーカイブ版の確認にとどまるため断言はできないが、『卷之貳』もまた『卷之壹』のような方法をもって挿絵に彩色が施されていたものと推測される。総見出し語数は432語<sup>9</sup>で、『卷之壹』のそれらと大きな差はない。1頁ごとの構成も『卷之壹』と共通しており、三段三行の枠中に9つの見出し語が収録されている。各見出し語に挿絵が添えられ、読み仮名付きの訳語が併記されている点についても『卷之壹』と一致するが、見出し語の発音表記が『卷之壹』では片仮名であったのに対して、『卷之貳』では平仮名が採用されている(図2)。



図2. 『卷之貳』本文における天文の頁 [国会図書館蔵]

『卷之貳』の序文を見るかぎり、本書の対象もまた童蒙を含む庶民、すなわち英語初学者に向けて編まれたことは明白なものの、発音表記が変更された経緯についてはふれられていない。ただし、1867年刊行の『英吉利箋階梯』の序文によれば、当時の庶民は片仮名さえも読めない者が多かったという。『英吉利箋階梯』の出版から6年後に編まれたのが『卷之貳』であるが、そのあいだに庶民の識字率が著しく向上したとは考えにくい。したがって、『卷之貳』は利用者のニーズをふまえた結果、発音表記に平仮名を新たに採用した可能性は十分に考えられる。

発音表記にオランダ語の影響がみられる点については、『卷之壹』から特段変わる様子もなく、挿絵の緻密さや見出し語の配列法についてもまた同様である<sup>10</sup>。

5.2. 先行資料との関連性

『卷之壹』については、『英吉利単語篇』の影響下で編纂されたことがすでに指摘されているが、『卷之貳』についてはこれまで検討がなされてこなかった。筆者による調査の結果、『卷之貳』についても『英吉利単語篇』を依拠資料とした形跡を見出した。つぎの図3は『英吉利単語篇』と『卷之貳』からの抜粋であるが、両者を比較するかぎり、少なくとも文房具の部類においては見出し語のほとんどが共通しているだけでなく、発音表記や訳語、それに対応する読み仮名の多くも一致している<sup>11</sup>。

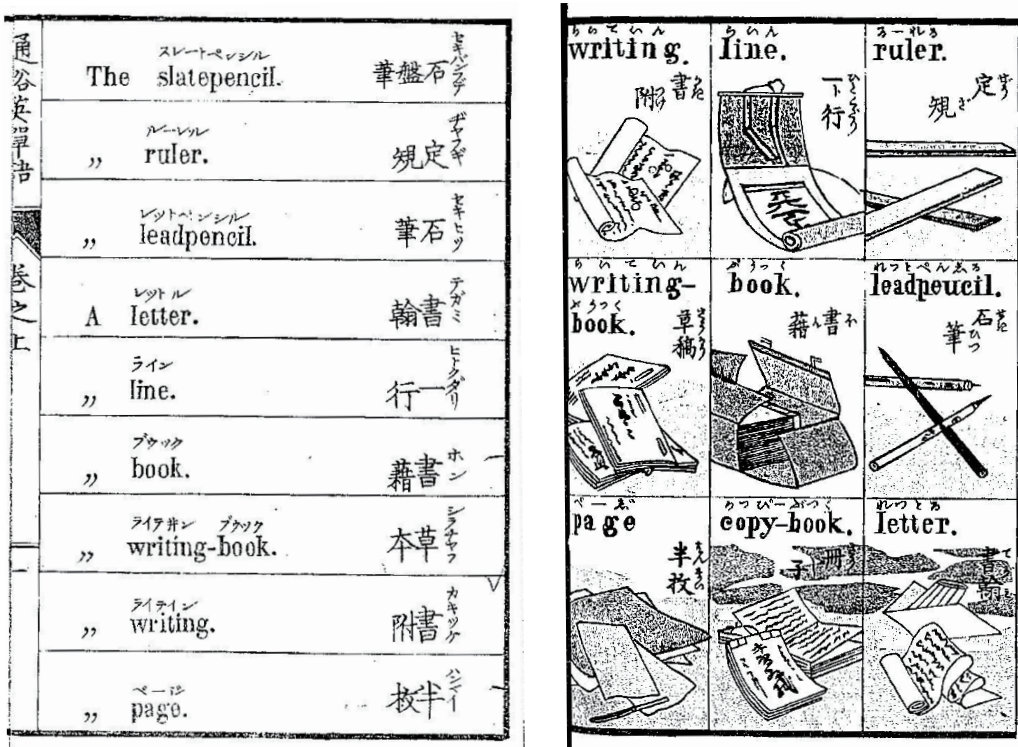


図3. 『英吉利単語篇』(左)と『卷之貳』(右)の本文における文房具の頁 [国会図書館蔵]

とくに、『卷之貳』における「letter. 書翰」という見出し語に注目すると、英語の綴りにおいて小文字のlと大文字のLとのあいだで明らかな混同が生じているが、このような誤りはもと

もと『英吉利単語篇』で頻繁にみられるものである（熊谷、2022）。同じ誤りは当該箇所だけでなく、『卷之貳』全体に散見することからも、本書が『英吉利単語篇』を依拠資料とした可能性は高まるといえよう。

『卷之貳』でもっとも注目すべきは、図3右側の“writing-book.”と“copy-book.”という見出し語である。前者は『英吉利単語篇』に収録されているが、後者は収録されていない。同様の例が『卷之貳』の本文35頁にもみられる。そこには“bombs.”<sup>12</sup>という見出し語があり、その下におおよそ同一の挿絵を携えた“shell.”という見出し語も確認できる。こちらも前者の見出し語は『英吉利単語篇』に収録されているのに対し、後者の見出し語は収録がない。では、『卷之貳』における“copy-book.”と“shell.”がどのような経緯で採用されたのかというと、それは1872年に出版された『英国単語図解』上巻を参考とした可能性が高い。本書は市川央坡により編まれた図解単語集の一つで、1867年に刊行された『対訳名物図編』の前半部に挿絵が追加されたものである<sup>13</sup>。『対訳名物図編』もまた、その源流は開成所の『英吉利単語篇』（1866）であるため、ここまでとりあげた『英吉利単語篇』や『英国単語図解』上巻、『対訳名物図編』などはすべて同系統の単語集だといえる。ただし、先の“copy-book.”と“shell.”という見出し語は『対訳名物図編』で初めて確認された特有の見出し語だというのが櫻井（2017）による報告である。櫻井によれば、1866年の『英吉利単語篇』にもともと収録されていた“writing-book.”と“bombs.”が、『対訳名物図編』の著者による判断で独自の変更が加えられた結果、“copy-book.”と“shell.”という見出し語が生じたのだという。つまり、『対訳名物図編』が編まれた当時をもって、『英吉利単語篇』系統の単語集が“writing-book.”や“bombs.”を収録するものと、“copy-book.”や“shell.”を収録する二つの系統に分岐したといえる。そして、これら二つの系統が『卷之貳』をもって再び合流をみたと考えられるのである（図4）。

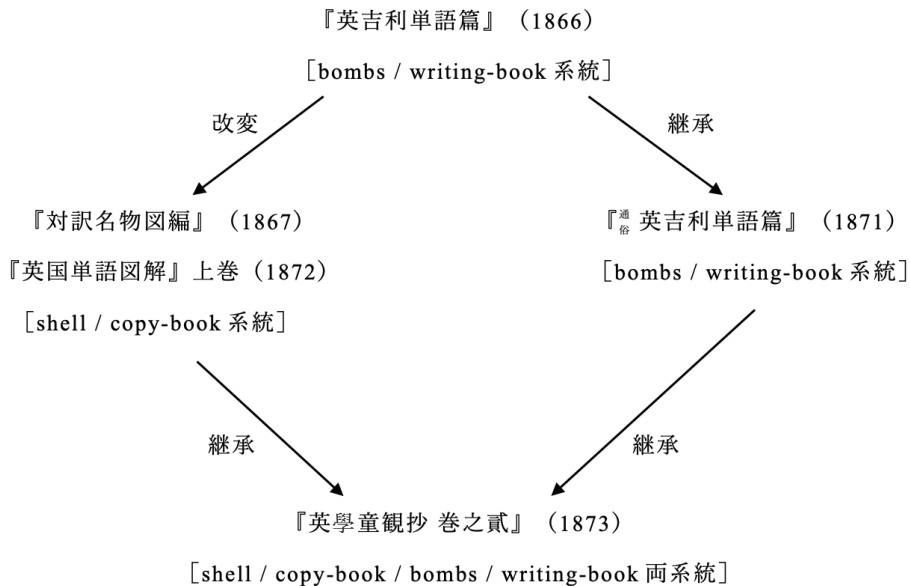


図4. 『英吉利単語篇』系統の単語集における見出し語の変遷図



ただし、前述のとおり、『卷之貳』が“copy-book.”と“shell.”の系統において直接参照した可能性が高いのは『対訳名物図編』ではなく『英国単語図解』上巻のほうである。なぜなら、『対訳名物図編』は配り本としての頒布にとどまった一方で、『英国単語図解』上巻は書肆から広く売り広めが行われたため、後者のほうが『卷之貳』の依拠資料となった可能性は高いからである。実際に、『卷之貳』と『英国単語図解』上巻の両書にはすべてではないものの、訳語だけでなく挿絵にも類似性が読み取れる。たとえば、両書に収録される“sand”や“sandbox”を比較すると、対象物の配置や角度、それらの背景がよく似ている(図5)<sup>14</sup>。

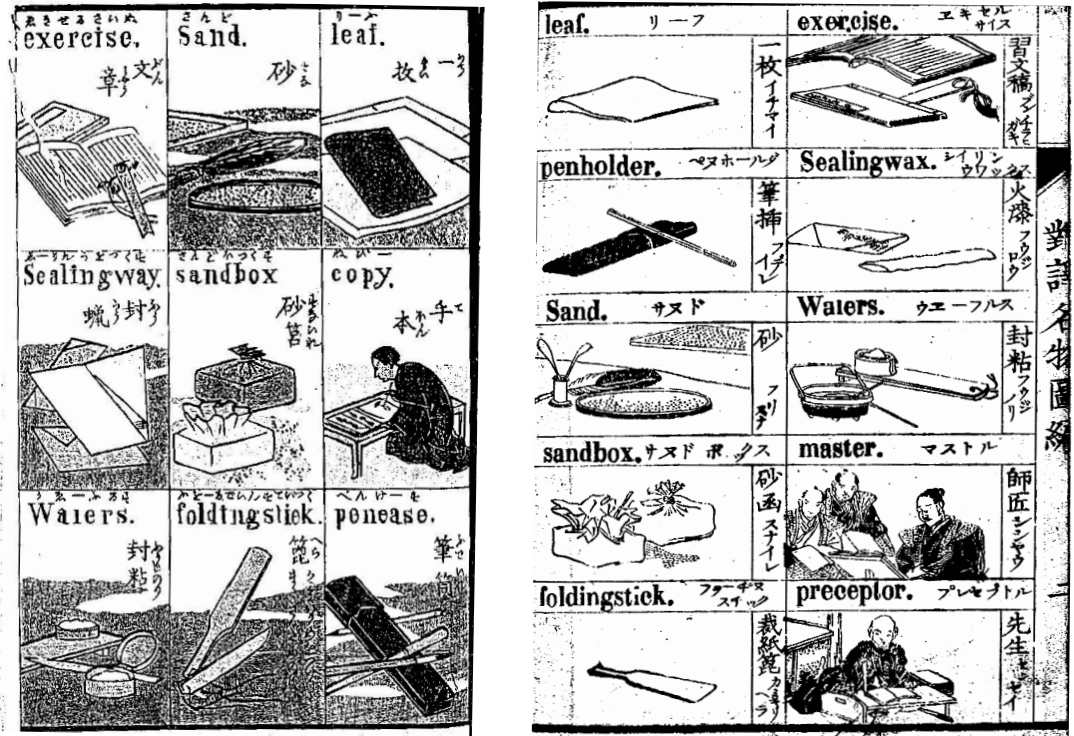


図5.『卷之貳』の国会図書館所蔵本(左)と『英国単語図解』上巻の  
国立教育政策研究所教育図書館所蔵本(右)における挿絵の比較

一方で、同図の“leaf.”を比べてみると、その描き方が一様ではないことがわかる。言い換えれば、いくらでも異なる描き方があるなかで、“sand”や“sandbox”のような類似性が認められるのは、決して偶然ではないだろう。そのような点からも、『卷之貳』は『英国単語図解』上巻からの影響力を読み取ることができるのである。

以上をまとめれば、従来『卷之壹』は『英吉利単語篇』を参考にしていただとの報告であるが、その続刊にあたる『卷之貳』については『英吉利単語篇』に加え、『英国単語図解』上巻にも依拠していたことが判明した。『卷之壹』は1873年10月の発刊であったが、『卷之貳』はそのわずか2カ月後という早さで出版されている。『卷之壹』が『英国単語図解』上巻に依拠していないと仮定すれば、著者の三木はかなり短い期間に『英国単語図解』上巻の存在を見出し、自分の編纂物に取り入れたことになるだろう。いずれにせよ、一度は分岐した『英吉利単語篇』の系統が統合される形で編纂された『卷之貳』は、当該の系統下における一つの集大成と考えることも



可能であろう。

## 6. 『混交字体』(1873)

### 6.1. 概要

一連の『英學童観抄』が出版された同年に、三木は『混交字体』という図解単語集も編纂している。これまでの研究ではほとんど言及がないが、松田編(2018, p.61)において「木版挿絵付英和単語集」を兼ねる資料として取りあげられている。何を兼ねているのかにはふれられていないが、その内容を見るかぎり、綴字書を兼ねているようである。具体的には1頁を上下段に分ち、上段ではアルファベットの綴り方やイロハ書き、主要な西洋国名などをローマ字で示している。下段が図解単語集となっていて、各英語の見出し語にはカナ発音の表記が添えられ、読み仮名を含む和訳が併記される様子は、『卷之壹』の特徴と一致しているが、総見出し語数は200語と少ない。2冊の『英學童観抄』のような冊子体ではなく、蛇腹状に折り畳んだ折本の形で編まれているため、長さが自由に調節でき、閲覧性や検索性に優れているのが特徴である。

### 6.2. 先行資料との関連性

第一に、『混交字体』と2冊の『英學童観抄』における挿絵に注目すると、著者がすべて同じ三木であるためであろうか、とりわけ『卷之壹』とのあいだにおいて類似性が認められる。例えば、「Beef<sup>ビーフ</sup> 牛肉<sup>ぎゅうにく</sup>」、「Vermicelli<sup>めんるい</sup> 麵類」などがそれにあたり、とくに「Salmon<sup>サルモン</sup> 過臘魚<sup>さけ</sup>」に至ってはその傾向が顕著である(図6)。

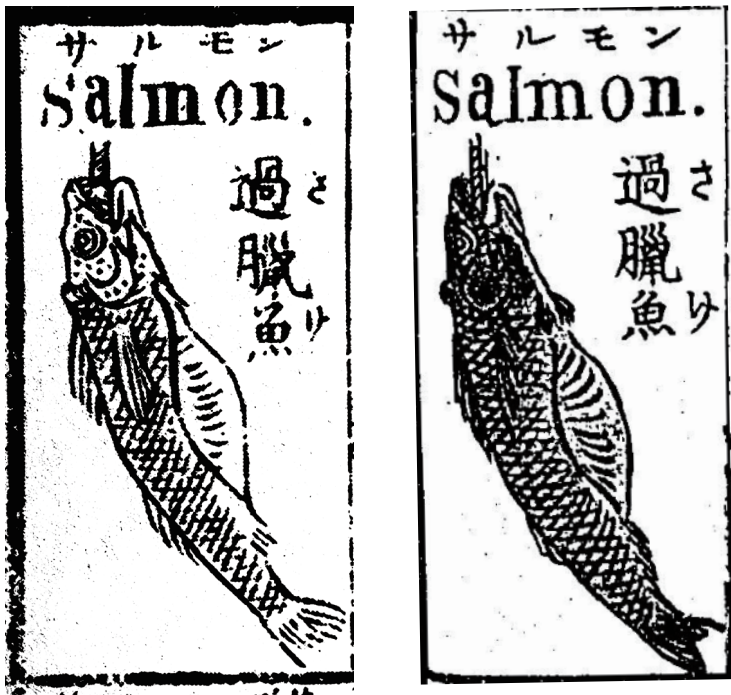


図6. 『混交字体』の『日本英学資料集成』R23所収本(左)および『卷之壹』の国会図書館所蔵本(右)における挿絵比較の例

一方で、『卷之貳』に収録される見出し語も『混交字体』には含まれているが、『卷之壹』とのあいだのような高い類似性は『卷之貳』の挿絵からは認められない。『混交字体』の発刊月は不明だが、見返しの末に「明治第六癸酉春日」と記されており、序文も春に記されている。「版本の場合、序文の年次は通常、刊年の少し前」（堀川、2010、p.58）であるから、少なくとも『混交字体』は同年の10月と12月に刊行された2冊の『英学童観抄』よりも早い刊行であったと推測される。この推定をより確かなものとするためには、『混交字体』と『英吉利単語篇』の関係性についても考える必要がある。『混交字体』の場合、『卷之壹』や『卷之貳』のように『英吉利単語篇』の影響を受けたかどうかを判断することは難しい。なぜなら、先に指摘したIとIの混同も含め、『混交字体』は2冊の『英学童観抄』に比べて見出し語のスペルミスが多く、それらの誤りは、『英吉利単語篇』では生じていないものも多く含まれるからである。しかし、その点が『混交字体』の編纂順序を決める重要な要素となりうる。例えば、『混交字体』における“lily”、“willow”、“eel”、“lizard”、“fly”などは共通してIがIの大文字となってしまうている。一方で、『英吉利単語篇』を確認すると、これらの単語にスペルミスはみられない。そこで改めて、先の五つの見出し語が収録された『卷之壹』にも注目してみる。すると、そちらでもスペルミスは認められなかった。『混交字体』にみられた多くのスペルミスが、『英吉利単語篇』を介した『卷之壹』ではみられないという事実は、『混交字体』が『卷之壹』に先んじて編纂された可能性をさらに高めるのには十分な根拠である。つまり、『混交字体』には『英吉利単語篇』に存在しないスペルミスが散見するため、『混交字体』が『英吉利単語篇』を参照した可能性は低いといえるし、反して『卷之壹』は『英吉利単語篇』に依拠したからこそ当該のスペルミスが解消されたと考えることが可能なのである。まとめると、『混交字体』の編纂後に『英吉利単語篇』の存在が見出され、それに依拠する過程でいくつかのスペルミスに修正が施され、『卷之壹』の編纂に至ったというのが筆者の推定である。

なお、『卷之壹』から『卷之貳』にかけて、発音表記が片仮名から平仮名に変更された点には前にも述べたが、『混交字体』では片仮名のほうが採用されている。仮名表記の変更が学習者への便宜だとすれば、平仮名を採用した『卷之貳』のあとに片仮名表記の『混交字体』が編纂される可能性はきわめて低い。そのような点も、『混交字体』が三木による最初期の図解単語集であることを示す証左の一つとなるだろう。

第二に、『混交字体』と『卷之壹』との挿絵には類似点だけでなく、興味深い異同も存在する。それが両書における「omelet<sup>16</sup> 玉子焼<sup>たまごやき</sup>」の描写である。先に出版されたと考えられる『混交字体』では、盆の上に西洋式の平皿が置かれ、その中には一見するとビスケットのようなものが並んでいるが、おそらくこれが“omelet”なのだろう。一方の『卷之壹』でみられる“omelet”は、描写の仕方が『混交字体』のものとは著しく異なる。中央に四角い卵焼き用のフライパンが描かれ、奥には箱に並べられた未使用の卵が、手前には卵の殻が描かれている（図7）。

2冊の編纂順序に鑑みるに、これは西洋的な描写から、日本的な描写へと変更されたことがわかる。たしかに、『混交字体』における“omelet”の挿絵はそれ自体の稚拙さもあいまって、日本語訳を見ないかぎりは何をあらわしているのかが理解できない。ゆえに、学習者の理解度を考慮し、『卷之壹』では日本的な事物で代替したのであろう。言い換えれば、西洋の事物を忠実に描くべきか、和製の類似物に置き換えて描くかという選択が、当時の英語学習者におけるニーズや理解力に合わせて変更されたことが示唆されるのである。当然、見出し語のなかには西洋の事物の実際がわからずに、仕方なく日本的なものに置き換えて描写する項目もあったと考えられ

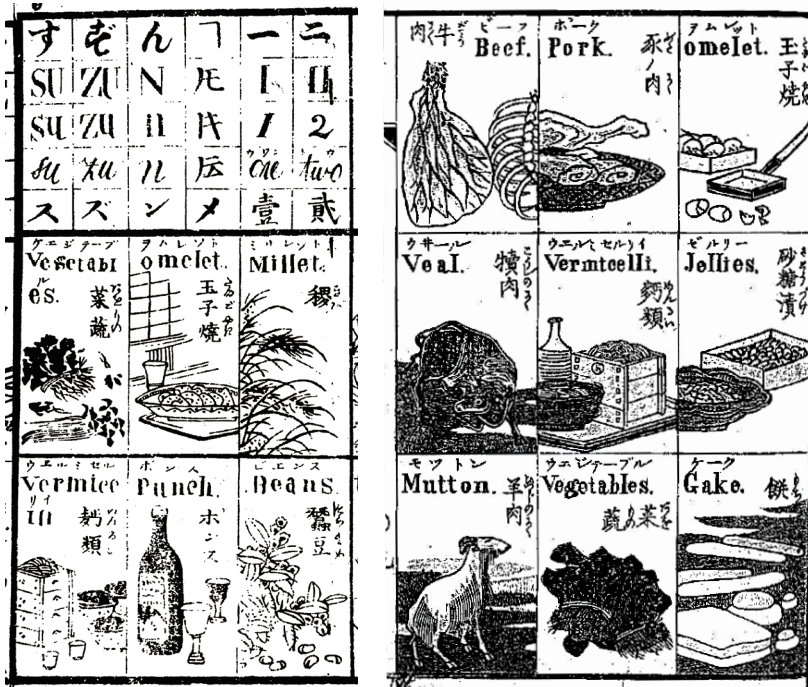


図7.『混交字体』の『日本英学資料集成』R23所収本(左)および『卷之壹』の国会図書館所蔵本(右)における“omelet”の頁

る。しかし、先で示した例の場合、著者の三木は“omelet”に関する西洋的な知識に乏しかったわけではないだろう。まだ西洋的な事物になじみのなかった一般庶民の学習者を考慮したうえでの措置であったならば、それは一定の評価が置かれるべき配慮である。先でふれた見出し語の発音表記に関してみても、学習者にとってより親しみのある仮名表記を採用する態度は、挿絵の描写方法に通ずるところがある。

ただし、和洋混交で対象物を描く場合には一定のリスクも考えなければならない。例えば、『卷之壹』では“Cake”<sup>17</sup>が西洋菓子ではなく餅の絵で表現され、『卷之貳』では“violin”が三味線として描かれるように、それらは時として学習者に誤った認識を与える可能性も否定できないからである。

## 7. 『西洋語繪解』(1873)

本論で最後に取りあげるのは、『西洋語繪解』という図解単語集である。著者は三木光斎だが、調査のかぎり東京外国語大学にしか所蔵されていないため稀覯本の一つだと思われる。表紙には題箋が貼られておらず、書名と著者名が墨で直書されているに加え、刊記や奥付がみられない。ただ、本文に注目すると、その内容は一見して前述の『卷之壹』と同一で、序文や収録語、収録語数や見出し語の提示方法もすべて一致した。つまり、本書は書名が異なるものの、内容それ自体は『卷之壹』だと考えてよい。しかし、先に取り上げた『卷之壹』のような刊記や奥付が見当たらない点をふまえると、『西洋語繪解』は書肆を通さない配り本、あるいは『卷之壹』出版以

前の試作本のようなものであった可能性が考えられる。

また、『西洋語繪解』は挿絵に限り、『卷之壹』との異同が存在した。全収録語のうち、「<sup>ハ</sup>ay<sup>ー</sup> 枯草<sup>かれくさ</sup>」に描かれた挿絵だけが、両書間で異なっている。つづく図8は、『卷之壹』における“Hay”の挿絵であるが、英語綴りのすぐ下に放射状に伸びた花のようなものが描かれている。だが、『西洋語繪解』ではその部分が描かれていない。



図8. 『卷之壹』における見出し語“Hay”の挿絵 [国会図書館蔵]

『西洋語繪解』が『卷之壹』の試作版だと仮定した場合、前に指摘した花のような描写は『卷之壹』に書名が変更され、書肆から売り広めが始まった際に追加されたものだと推測も可能だが、状況はより複雑である。なぜなら、『日本英学資料集成』(1976)に所収される別の『卷之壹』を確認すると、花の描写が存在しなかったからである。つまり、『西洋語繪解』と『日本英学資料集成』の『卷之壹』には花の描写がなく、国会図書館所蔵本の『卷之壹』だけに当該の描写がみられるのである。これは花の描写が『西洋語繪解』から『卷之壹』に変遷するときではなく、『卷之壹』それ自体が版を重ねるうちに追加されたことを示唆している。したがって、『西洋語繪解』と『卷之壹』の決定的な違いは、書肆から売り広めが行われたか否かという点だけであろう。『西洋語繪解』の書名をもつ英学書が1冊にとどまるのも、配り本として限られた数しか存在しなかったことを象徴するよう思われる。



## 8. 考察とまとめ

### 8.1. 図解単語集としての評価

本研究では、おもに4冊の図解単語集の変遷や特徴を明らかにした。1871年に『英吉利単語篇』が刊行された時点で、それは独学可能な体裁として整っていたが、その特徴を引き継いだうえでより学習者に便宜を図ったのが、三木光斎の図解単語集だといえる。三木の編んだ単語集には共通して、振り仮名付きの訳語、発音表記、そして挿絵が付随していた。単語集のように、語彙をリスト形式で学ぶ有効性については現代でも認められているところで(例えば、笠原、2010; Milton, 2009; Nation, 1990)、Prince (1995)の主張にならえば、このような学習法は英語初学者に向いているという。三木の単語集もまた、当時の庶民、すなわち英語初学者に向けて編纂されていたから、先行研究の指摘と矛盾する点はない。発音表記についてはオランダ語訛りの影響が残っており、英語の音声を学ぶという点においてはいくらかの制約があった点を認めなくてはならない。しかし、見出し語と訳語の単純なペア学習に加えて、聴覚からの語彙学習を可能としたこともまた事実である<sup>18</sup>。

さらに、図解という視覚情報を付加することで、学習者は未知の語彙に対する障壁を低くすることができたであろう。竹中(2008)も述べるように、西洋文化の摂取に喘ぐ当時の日本人にとって理解が困難なもの、例えば本来日本に存在しなかった概念を、より理解しやすくするために取り入れられた手法の一つが、語彙の図解化であった。まさに「百聞は一見に如かず」との考えを単語集に反映させた方法として、当時画期的であったのは確かなのである。熊谷(2019)が「日本人と単語集——日本における英語語彙学習教材史・江戸編——」の考察でも述べたとおり、図解が学習者の語彙習得を補助するという事実は、現代でも認められている。それが語彙習得理論として構築されていなかった江戸時代や明治時代において、すでに教材で体現されていたという事は驚くべきことであるし、一定の学習効果があったと推測される。

ただし、三木の単語集の分析からもわかるように、当時の図解単語集における挿絵は、必ずしも英語の見出し語を正しく描写していない場合がある。前述のとおり、日本の代替物で西洋の事物を描写して一応の責を果たすだけでは、それぞれの語彙が包含する意味を正確に理解することは困難で、時には学習者に誤った認識を植えつけるおそれもある。また、そのような手法を取り入れた結果、単語集の挿絵は和洋混交となり、その統一性が失われるのもまた事実である。図解単語集のなかには実物の模写ばかりに力が注がれ、原語に対しては不正確な訳語があてられる場合がある、と指摘するのは渡辺(1962b)であるが、挿絵の多くはその訳語に沿う形で描かれることが多いため、不正確な挿絵もまた学習者の認識のズレをさらに広げる要因になりうる。

しかし、語彙習得理論の観点に立てば、近似的なもので語彙の理解を試みることは必ずしも誤った方法ではない。語彙学習の方略のなかにはイメージ媒介方略と呼ばれるものがある。これは「2種類の記憶材料を何らかのイメージで結びつけることによって検索手がかりを増やし、記憶成績の向上を図る記憶方略」(門田・池村、2006、p.87)のことをさし、一定の効果が期待できる方略の一つとされる。これはPaivio(1986)の提唱した二重符号化モデルとの関連が深い。英語の見出し語と訳語、それを示す図解を結びつけて学ぶ時、われわれのなかでは言語コードとそれともなうイメージで二重に表象される。これは語彙の意味が二重符号化されたことを意味し、単に見出し語とその訳語を対で覚えるよりも、想起の手がかりにかかわる情報が多くなるため、記憶再生が強化されるのである。つまり、『英吉利単語篇』のように見出し語とその訳語の羅列だけで語彙を学ぶよりも、それらに対応した図解を含めて学習したほうが習得効果は期待され

る。また、二重符号化モデルは「意味情報が学習者の概念の中で具体化されるとき学習は促進される」(門田ほか、2003、p.280)ことを示唆しているという。門田ほかの具体例にならえば、学習語彙を個人の経験や生活と比較したり、関連づけたりすることが語彙習得を促進させるという。この点をふまえると、西洋的な事物でも日本人になじみのあるものに置き換えて提示されたほうが、語彙の理解は進むと考えられるのである。当時の日本人にとってなじみのない概念ならなおさらに、より身近な事物に置き換えて語彙と結びつけたほうが、想起の手がかりとなりやすいからである。ゆえに、事物の挿絵が意図的であったか否かにかかわらず、日本的なもので代替されたことによって、結果的に当時の学習者の語彙習得がより効果的に進んだ可能性は否定できない。ただし、門田・池村(2006)も指摘するとおり、第一言語と第二言語との概念のあいだに生じるズレに関しては、のちに修正される必要が生じてくる。例えば、先にとりあげた『英學童観抄 卷之壹』における見出し語“omelet”に話を戻す。“omelet”に対して「玉子焼」という訳語と、それに準じた日本式の挿絵を学習者が目にした際、当然“omelet”とは卵料理であるとともに、その特徴が日本の玉子焼と同じであるか、それに類したものであるとの理解が働く。つまり、“omelet”という綴りを見て、あるいは発音を聞いて「玉子焼」という訳語、またはその日本的な挿絵が想起されるようになれば、当該の語彙においてある程度の理解が進んでいるといえる。しかし、西洋の“omelet”と日本の玉子焼は本来まったく異なった料理である。“omelet”は『大言海』(1956、p.351)で以下のように定義されている。

玉子ノきみ、しろみニ牛乳ヲ加ヘ、搔キマゼテ液ヲ作り、別ニ肉類、玉葱ナド、細カニ刻ミテ、砂糖、塩、胡椒ニテ味ヲツケテ具ヲ作り、平鍋ヲ火ニカケ、ぱたヲヒキ、液ヲ流シコミ、具ヲ載セ、焼ケタルヲ裏返シテ包ミ、又、焼キテ成ル

一方、玉子焼とは「鶏卵ノ液ニ、砂糖、醤油ナドヲ加ヘテ搔キマゼ、油ヲ延キタル玉子焼鍋ニテ、炙リ焼キタルモノ<sup>19)</sup>」とのことであるが、両者は材料からしてみても、それにとりまなう味付け、香りもまた異なる料理である。つまり、「omelet = 玉子焼」という第一段階の結びつけは必ずしも正確ではなく、そのズレが修正されることで初めて“omelet”が正しく認識されるといえよう。学習者が当初に有していた意味知識が修正される過程を「意味的発達」と呼ぶが、この発達は語彙の用例に多くふれたり、明示的な指導を受けたりすることで促進されると考えられている(中田、2019)。現代のわれわれであれば、代替物の理解から生じたズレを修正することはきわめて容易であろう。しかし、かつての日本人にとってはどうであっただろうか。西洋文化の流入が盛んとなった時期だとはいえ、現代ほど簡便には西洋の事物を実際に確認することは困難であっただろうし、言語間の意味におけるズレを明快に説明できる人間も多くはなかったはずである。そのような点も含めると、質としては萌芽的なものにとどまっていたといわざるを得ないのが当時の図解単語集であったといえるが、明治維新後の混乱期の最中であったことを加味すると、致し方ない側面もあるのかもしれない。

## 8.2. おわりに

本研究では、明治初期のベストセラーでもあった『英吉利単語篇』の影響下において、三木光斎の図解単語集がどのような変遷を辿り、明治期の英語語彙学習の一端を支えたかについての比較調査を行ってきた。その結果、1873年に刊行が集中した三木の図解単語集は『混交字体』、『西洋語繪解』、『英學童観抄 卷之壹』、『英學童観抄 卷之貳』の順序で編纂が行われた可能性が

高いことを導き出した。さらに、『英吉利単語篇』から明らかな影響を受けた単語集は、『卷之壹』と『卷之貳』、そして『卷之壹』の試作本だと考えられる『西洋語繪解』の3冊であることを明らかにした。三木が最初に編んだと考えられる『混交字体』からはそのような形跡がみられなかったことから、三木は非常に短い期間で『英吉利単語篇』の存在を見出し、自身の著作に取り入れたことが推測される。さらに、『卷之貳』では『英吉利単語篇』に加えて『英国単語図解』上巻を依拠資料に含めたり、見出し語の発音表記をより学習者のなじみのある平仮名に変更したりする様子から考えるに、著者の三木はかなり精力的に単語集の編纂に従事していたと考えてよいだろう。いずれにせよ、一度は異なる見出し語をおさめるに至った『英吉利単語篇』の二系統が、『卷之貳』において再び合流をみたという事実は、単語集編纂史の観点からも注目すべき事象である。

三木の単語集は、『英吉利単語篇』の見出し語をすべて収録するような、いわば「直系」に属する単語集ではなかったが、随所にみられるくふうから、多くの学習者に歓迎されたことだろう。そのような意味で、1872年に刊行された『英国単語図解』上巻は、『英吉利単語篇』の系統にきわめて忠実な図解単語集の一つとして、三木の単語集群とは双璧をなす存在だったとも考えられる。しかし、『英国単語図解』下巻が刊行されたのは1874年の1月で、三木の著作群に一步遅れた刊行だった。総見出し語数には限りがありながらも、一連の『英国単語図解』に先んじて単語集を完結させた三木の熱量は相当なものであったのかもしれない。1873年に三木の単語集編纂が集中的に続いたのも、1872年の『英国単語図解』上巻の存在が大きかったと考えられるのである。いずれにせよ、『英吉利単語篇』の流布が三木の単語集編纂につながったことは確実であり、それは改めて『英吉利単語篇』の波及力を物語るものでもあろう。時代の潮流を敏感に感じ取って自身の単語集に昇華する三木の観察眼と行動力は、奇しくも『英吉利単語篇』の著者である梅浦元善と通ずるところがある。激動の時代において、英語語彙学習という観点から日本を支えようと奔走したうちの一人が、三木光斎であったのかもしれない。

## 註

- 1 渡辺 (1962a) では「卷之卷」としているが、本研究の便宜上、実際の調査資料に記載された「卷之壹」に表記を統一して論を進める。
- 2 櫻井 (2000) もまた、『英學童観抄』を『英吉利単語篇』系統の単語集に位置づけているが、その影響関係には触れていない。また、櫻井の述べるところの『英學童観抄』が、『卷之壹』と『卷之貳』のどちらについて述べているのかについても明らかではない。
- 3 『英學童観抄・一卷』(特34-64, <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/869615>) を参照。
- 4 松田編 (2018) の目録によると、同名の書の収録語数が386語とされており、筆者の算出と一致しない。当該の目録において欠損部の報告はないため、異版の可能性も示唆されるが、現時点においてその詳細は判明していない。
- 5 『日本人名大事典』第一巻 (1937, p.439)・「デジタル版 日本人名大辞典+Plus」(2015, <https://kotobank.jp/dictionary/nihonjinmei/>)
- 6 ただし、はじめの1頁から4頁までは三段四行の十二枠で構成されている。
- 7 『和洋以呂波』は『日本英学資料集成』R23所収本、『和洋字混部類 初編』は東京外国語大学付属図書館所蔵本を参照。
- 8 『英學童観抄・二巻』(特34-64, <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/869616>) を参照。
- 9 松田編 (2018) の報告では360語となっており、『卷之壹』と同じく筆者の算出と一致しない。

- 10 『巻之貳』は官職から始まり、武器や戦争など、およそ23の部類分けによって構成されているようである。
- 11 『英吉利単語篇』上巻(特34-91, <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/903080>)を参照。
- 12 原文では“bomhs.”のようにbとhの混同が生じてしまっている。
- 13 『対訳名物図編』については熊谷(2019; 2022)を参照されたい。
- 14 『英国単語図解』上巻(教育図書館近代教科書デジタルアーカイブ: <https://nierlib.nier.go.jp/lib/database/KINDAI/EG00004950/900089885.pdf>)を参照。
- 15 本文では誤読を防ぐため正確な綴りで記したが、もともと『巻之壹』では“Vermicelli”、『混交字体』では“Vermicelli”のような誤った綴りで示されている。
- 16 本文では『巻之壹』における片仮名表記を採用したが、『混交字体』では「ヲムレット」のように促音が大きいままになっている。以下、本文では当該の表記で統一する。
- 17 本文では“Gake”との誤りが生じている。
- 18 マルチモーダルに語彙を繰り返し学習することは現代でも推奨される方法の一つである(例えば、前田、2011; 投野、2015)。
- 19 大槻(1956) p.1288.

### 引用文献

- Milton, J. (2009). *Measuring second language vocabulary acquisition*. Bristol, UK: Multilingual Matters.
- Nation, I. S. P. (1990). *Teaching and learning vocabulary*. Heinle: Cengage Learning.
- Paivio, A. (1986). *Mental representations: A dual coding approach*. New York: Oxford University Press.
- Prince, P. (1995). Second language vocabulary learning: The role of context versus translations as a function of proficiency. *The Modern Language Journal*, 80 (4), 478-493.
- 大槻文彦(編)(1956). 『新編 大言海』 富山房.
- 笠原究(2010). 「授業での効果的な語彙指導」『英語教育』7, 54-56.
- 門田修平・池村大一郎(2006). 『英語語彙指導ハンドブック』大修館書店.
- 門田修平・池村大一郎・中西義子・野呂忠司・島本たい子・横川博一(2003). 『英語のメンタルレキシコン: 語彙の獲得・処理・学習』松柏社.
- 熊谷允岐(2019). 「日本人と単語集: 日本における英語語彙学習教材史: 江戸編」『異文化コミュニケーション論集』17, 41-56. 立教大学異文化コミュニケーション研究科.
- 熊谷允岐(2022). 『通俗 英吉利単語篇』はなぜ売れたのか: 単語集変遷史から見た編纂意義の再考」『異文化コミュニケーション論集』20, 109-124. 立教大学異文化コミュニケーション研究科.
- 櫻井豪人(2000). 『維新前後西洋語対訳単語集の基礎的研究』名古屋大学大学院博士論文 [未刊行].
- 櫻井豪人(2017). 『開成所単語集II Baedeker 原本・対訳名物図編・英仏単語便覧・対照表2』 港の人.
- 下中邦彦(編)(1937). 『日本人名大事典(新撰大人名辭典)第一巻』 平凡社.
- 竹中龍範(2008). 「幕末・明初の英語図解単語集: 『対訳名物圖編』(慶応3年)ほか」『香川大学図書館報』4, 2-10.
- 投野由紀夫(2015). 『発信力をつける新しい英語語彙指導: プロセス可視化とチャンク学習』三省堂.
- 豊田實(1963). 『日本英学史の研究』千城書房.
- 中田達也(2019). 『英単語学習の科学』研究社.
- 堀川貴司(2010). 『書誌学入門—古典籍を見る・知る・読む』 勉誠出版.
- 前田啓朗(2011). 「学習スタイルに応じた語彙指導」『英語教育』8, 81.
- 松田清(編)(2018). 『英単語集 若林正治コレクション英学資料目録』 神戸外語大学附属図書館.
- 屋名池誠(1991). 「綴字書・運筆書・横文字紹介書」大阪女子大学附属図書館(編)『英蘭学英学資料選』(pp. 39-82). 大阪女子大学.
- 雄松堂フィルム出版(編)(1976). 『マイクロフィルム版 日本英学資料集成』 雄松堂フィルム出版.
- 渡辺実(1962a). 「英學童觀抄 卷之卷」大阪女子大学附属図書館(編)『大阪女子大学英学資料解題』(pp. 540-542). 大阪女子大学.
- 渡辺実(1962b). 「童解英語圖會 初帙」大阪女子大学附属図書館(編)『大阪女子大学英学資料解題』(pp. 234-236). 大阪女子大学.